令和７年１月２９日(水)陸奥新報（５面）

社説

弘大が中核研究大に

世界に貢献できる研究拠点を

弘前大学が、日本の研究力の底上げを図る文部科学省の２０２４年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（通称Ｊ－ＰＥＡＫＳ）」に採択された。５年間で最大55億円の支援を受け、国内外の大学などと連携し「グローバルＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇ（ウェルビーイング、心身の健康と幸福）研究」で世界トップレベルの研究拠点を目指す。

少子化で大学の生き残り競争が一段と厳しくなっている今の時代を勝ち抜くための大きな一歩となる。事業採択がその目的通り、知的財産の宝庫である弘前大の価値をさらに高め、国内外の研究者らが集結するきっかけとなり、この地域から世界的な研究成果を生み出すことにつながれば幸いだ。地域へのさまざまな波及効果も期待され、今後の取り組みに注目したい。

文部科学省は世界トップクラスの研究者を育成し、研究成果の活用を目指すため、10兆円規模の「大学ファンド」で支援する「国際卓越研究大学制度」を設け、東北大が認定されるなど数校が対象となる見通し。地域中核研究大はこれに次ぐもので、地域課題の研究に先進的に取り組む中核大学や、特定分野の研究に強みを持ち社会実装の拠点などを有する大学を支援する。全国に８００近い大学がある中から23、24年度の２年間で計25大学を選んだ。

その一つとなった弘前大。大規模な住民合同健診「岩木健康増進プロジェクト」のビッグデータを核とした研究を進める「弘大ＣＯＩ－ＮＥＸＴ」を拠点に、横断的かつ縦断的研究で多角的な健康寿命延伸、地域活性化に取り組んできた。今後は米ハーバード大や京都大、東京大といった国内外のトップ大学や、北東北の大学などと連携し「予防医学」「科学技術」「社会科学」の三つの領域を柱としたウェルビーイング研究で世界トップを目指す。３月には拠点となる施設「グローバルＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇ総合研究棟」が本町キャンパス内に完成予定という。

さらに大学院改革も推し進める考え。八つの研究科がある修士課程では、各研究科にウェルビーイングコース（定員・若干名）を設置。25年度から学生を募集し、26年度入学を予定している。７～８年後には八つの研究科を一つに統合し、全学挙げて取り組む構想だ。総合大学としての強みを生かし、学部横断型の展開で研究力を引き上げ、ウェルビーイングの世界的研究拠点を構築する構えだ。

「学都弘前」と称されるが、日ごろ気付きにくい大学立地のメリットは、弘前のみならず本県やその周辺地域にとって多大だ。少子化が進む中で、大学の生き残りを懸けた取り組みを地域としてもできる限り後押しし、世界に貢献できる研究拠点としての弘前大の発展と同時に研究都市として地域が発展していくことを期待したい。